

<小学生・中学生・高校生の意見発表>

おじいちゃん、おばあちゃんを大切に

大塚小学校 6年 石黒 佑依

佑依さんは、明るい性格で、体を動かすことが大好きです。チアリーディングを習っており、夏のふれあい活動では、笑顔いっぱいの、すばらしい演技を披露しました。前期は学級委員として、クラスをまとめてくれました。

私のお母さんは、以前、老人ホームで働いていました。私は、学校が休みのときは、お母さんのお手伝いをしていました。初めてお手伝いをしたころの私は

「お年寄りなんか苦手だし、おてつだいなんてめんどくさい。」

とっていました。でも今の私はちがいます。みんなにお年寄りを大切にしてもらいたいと思います。

おじいちゃんやおばあちゃんと接してみて、いいところをたくさん見つけました。1つ目は、おばあちゃんたちは手先が器用で、私たちよりいろいろなことがずっと上手にできることです。おばあちゃんたちは、ぬり絵がすごく上手です。色合いもよく、細かいところまでていねいにぬって、できあがりがかっこいいです。例えばバラの花は、トゲまでていねいにぬって、生き生きとしたバラの花ができあがります。そして、ていねいにぬったバラの花の絵を私にくれたときは、とてもうれしかったです。

2つ目は、おじいちゃんたちのお話が長くてもおもしろいことです。例えば、

「塩津駅の近くにある居酒屋の枝豆がすごくおいしいんだよな。おじょうちゃんも行ったことあるか？」

なんて、私にはあまり関係のないことを聞か

れます。私は、そんな居酒屋さんなんて知らないけど、友達とは絶対に話題にならないような会話がとてもおもしろくて、笑いがとまりませんでした。

確かに、お年寄りのお世話をするのは大変です。食事や着がえ、トイレやお風呂など、老人ホームで働いているお母さんの様子を見ると、私にはとてもまねできることではないと思います。でも、いずれは私たちもおじいちゃんやおばあちゃんになります。そのときに、元気なかわいい子ども達に、

「お手伝いなんてめんどくさい。」

「やりたくないな。」

なんて言われたら私は悲しいです。だから、元気な私たちが今のおじいちゃんやおばあちゃんたちのお手伝いをして、うれしい気持ちになってもらいたいと思います。

また、人見知りをする人や、あまり人とかわるのが得意ではない人もいます。でも、おじいちゃんおばあちゃんは、いつもにこにこしているの、こちらも自然とにこにこしてしまいます。おばあちゃんたちは、きっと私たち子どもが大好きで、会いたいと



思ってくれているのだと思います。

おじいちゃんやおばあちゃんは、実際に接してみると、やさしくて、おもしろくて、一緒にいるだけでいやされます。だから、元気

な私たちがたくさんお世話をしたり、お話をしたりして、おじいちゃんやおばあちゃんに元気をプレゼントしたいなと思います。

言葉の怖さ

西浦小学校 6年 丸山 翔 悠

丸山くんは、明朗活発で、いつも学級を明るくしてくれます。運動会では大将として、一生懸命全校をリードしました。また、児童会活動や交通少年団員としても活躍する頼もしい存在です。

「言葉の怖さ」これは僕が生活の中でいつも感じていることです。普段何気なく使っている言葉ですが、僕はある日をきっかけにして言葉の使い方について考え直すようになりました。

今からおよそ4年前のことです。塾の帰りに立ち寄ったコンビニでそれは起きました。高校生か大学生くらいの男の人が会計を済ませようとレジの列に並んでいました。僕と兄はその人の後ろに並んでいました。そのとき突然、若い男の人は、何かを取り忘れたのか、並んでいた列から出て、どこかへ行ってしまいました。だから、僕は一緒にいた兄と前に詰めて並ぶことにしました。しかし、そこへ戻ってきた若い男の人は僕たちに対して

「おい、どけよ。おれが並んどっただろう。何でお前らが詰めとるだ。」

と、とても大きな声でどなってきました。その瞬間、コンビニは静まり返りました。僕と兄は黙り込んでしまいました。もちろん店員さんや、周りのお客さんもみんな戸惑っていたのを今でも覚えています。そのとき僕はまだ小学校3年生だったので、心の底から泣き

出しそうでした。コンビニから帰る車内で母親にそのことを伝えたと、

「それは怖かったね。でも翔悠はお兄ちゃんや弟に同じことをやってるでしょ。だからそれが降りかかってきたんじゃない。」

と笑われてしまいました。一瞬にして目の前が真っ白になりました。まさに「自業自得」です。この自業自得という言葉は、母から毎日のように言い聞かされていた言葉です。よく考えてみると、それまでの僕は受け止める人の気持ちを何も考えず「うるせえな」「なにやってんだよ」など、兄弟や友だちの心を傷つけ、時には泣かせてしまったこともよくありました。でも、この出来事のおかげで何気なく自分の発した言葉が人の心を傷つけていたことを初めて知りました。



この日から僕は言葉の使い方に関心を持ち、決意しました。言葉を発する前に、この言葉が受け止める人にどう映るかを自分なりに考えるようになりました。それ以降、身の回りの人との関係が少しずつ変わってき

ているような気がしています。けんかばかりしていた兄は、僕に優しく接してくれるようになりました。また、以前に比べてたくさんの友達が僕に話しかけてくれるようになりました。

自分が発した言葉は良くも悪くも自分に返ってくる。そんなことをあの出来事から学びました。言葉は心も通じ合い、仲良くなれ

るとても便利なものです。しかし、その言葉の使い方を間違えると人の心を傷つけてしまう危険なものにもなります。普段の生活を振り返ると、言葉を危険な方で使っている人が多いように思います。だから、僕たちは言葉の使い方をじっくり考えていかなければならないと思います。

大切にすべき物

中部中学校 3年 川口 杏優

杏優さんは誰に対しても優しく、仲間からの信頼が厚いです。前期は副級長として学級をまとめ、雰囲気の良い学級を作り上げました。生徒会では、副会長として誰からも愛される中部中を目指してがんばっています。

目が見えなくてもギターを弾いて歌っている。耳が聴こえなくても手話で楽しく会話をしている。足が悪くて歩けなくても堂々とスピーチをしている。そんな方々と出会い、ふれ合ったとき今までの自分のことがなんだか小さく思えた。私にできることって何だろう。

今年の春。私はボランティア活動に参加した。視覚・聴覚・精神など様々な障害をもった方と出会い、どのような不便があるのか体験をした。何不自由なく過ごしてきた私にとって、それは衝撃の連続だった。目隠しされるだけで急に世界が広く思えた。それなのに暗いせまい闇の中に閉じこめられたような気分になった。とにかく怖かった。

つえを器用に使って歩く姿や、耳が聴こえなくても言葉を話す姿は、きっと私たちには分からない、分かることのできない大きな壁を上ってきたからだと思った。そんな姿に大きな力をもたらした。

そして私は、ある1つのことを学んだ。それは、「障害があってもなくても同じいのちである」こと。見た目や障害者という肩がきがあるだけで偏見をもたれ、苦しむなんて間違っている。どうして偏見などもつ必要があるのか私には理解できない。それどころか大切なことを学ばせてくれた。

彼らに出会ったことで私は「言葉」の見方を大きく変えようと思った。「死んじゃえ」「消えろ」そう言って本当に死んでしまったらどうするのだろう。言葉の1つ1つに言霊があつてどの言葉を選ぶかで大きく変わる。

彼らのように私たちより重い何かを背負ってゴールを目指している人がいる。それなのにたやすく「死ね」なんて絶対に言えない。



この社会にいる全ての人が選ばれてきた

人。2億分の1の確率で誕生してきた。消えてもいい命なんて1つもない。みんな同じ大切な命。これから生きていく中でどれ程の命と出会えるか楽しみだ。

みんなと違っていているから。感覚がずれているから。そんな理由で人を簡単に差別せず歩みより手を差しのべてみてください。きっとあなたにとっても相手にとっても幸せにつ

ながるだろう。

誰の命も平等。全ての命を大切に、感謝の気持ちを忘れないこと。そして、自分にできることをやってみること。それは必ず誰かの役に立っている。それが私の目指す明るい社会への第一歩だと思う。

家族と言葉

三谷中学校 3年 太田 純 泉

純泉さんは、自分からいろいろなことに挑戦し、いつも前向きです。吹奏楽部では、後輩に分かりやすく指導をするので慕われています。整美委員会の副委員長として、教室環境の整頓をみんなに呼びかけたり、コンクールの計画を立てたりと活躍しました。

「悲しみや苦しみがいつの日か喜びに変わるだろう I believe in future 信じてる。」

これは、みなさんもよく知っている『ビリーブ』という歌の一節です。私は、この歌にとっても思い入れがあります。

それは、私が姉と一緒に替え歌にして母の誕生日にプレゼントしたものだからです。

この歌をプレゼントした理由。それは、母に恩返しをしたいと思ったからです。あるとき、母に元気がないことがありました。そんなときでも、私たちが悩んでいると、

「お母さんは、いつでもあなたたちの味方だからね。ずっと一緒だよ。」

そう言って元気づけてくれました。そんな母に元のように元気になってほしい。今度は私たちが、この歌で勇気づけてあげて、少しでも母の力になりたい。そう思ったのです。

「悲しみや苦しみがいつの日か喜びに変わるだろう I believe in future ありがとう。」

替え歌といっても「信じてる」を「ありがとう」に替える、たったそれだけでした。

それでも母は、今でもこのことを覚えてくれています。

私たちにできることはそれぐらいだったけど、この歌をプレゼントしたあと、少し母が元気になってくれた気がしました。

そのとき、私は思いました。家族に互いを思いやる気持ちがあれば幸せになれるんだと。そして、思

いやる気持ちを言葉に表すことが大事なんだと。

私は言葉の大切さを感じたことが、学校の中でもあります。

私は中学校入学の時、転校してきました。クラスはもちろん、学年全員知らない人ばかり



りでした。そんな中、何人かの女子が声をかけてくれました。そのときのことは、今でも忘れません。不安でいっぱいだった私を救ってくれた気がしました。しばらくして、その子たちとたくさん話せるようになり、今では仲のよい友だちです。それから、どんどん友だちが増えていきました。

また、吹奏楽部に入ったばかりの頃、希望の楽器を担当することができず、落ち込んでいることがありました。でも、先輩方や同級生・先生、いろいろな人が「がんばってね」と声をかけてくれました。たった一言なのに、それが嬉しくて、がんばろう、という気持ちになれました。そして、今ではこの楽器が大好きになり、この楽器に出会えたことを幸せ

に感じています。

こうした経験から、言葉は物事を伝えるためだけのものではなく、互いを思いやる気持ち、信じる気持ち、そのものだと思います。それは、家族はもちろん、学校や社会でも同じことです。

私は、思いやりの心から出た言葉が、人と人、そして、家族を結びつける大切な役割を果たしていることを知りました、

だから、私は誰もが家族や人を思い、日々の言葉を大切に作る社会になっていけば、笑顔がもっと増え、明るい生活ができるようになると思います。私が今、笑顔でいられるように。

ユニセフハウスを訪問して

大塚中学校 3年 鈴木 あいり

鈴木さんは、明るく、誰に対しても本当に優しく接することができます。リーダーシップもあり、体育大会応援合戦では、副団長として、1年から3年の仲間をまとめ、見事な演技を披露してくれました。

みなさんは、発展途上国の方の生活を知っていますか。

私は、今年6月、修学旅行の班別首都分散学習でユニセフハウスを訪問しました。

ここで、私は、衝撃を受けて帰ってきました。私が知っていたのは、小さな小さな世界の中だけだったのだと。将来、医療に関わる仕事に就きたいと思っているのに、何も分かっていない自分を恥ずかしく思いました。

ハイチやマリのビデオ。私は、今学校に行っていますが、ハイチやチリの子どもたちは、学校に行けず毎日辛い仕事をしていました。食料もまともになく、栄養失調でなくなってしまう子供も少なくありませんでした。

展示物。私がいちばん気になったものが、ネパールで使われている水がめです。実際に持ってみたら重過ぎて、少し歩くことさえ大変でした。ネパールの子供たちは、約15kgもある水がめをもち、一日に何回も何回も水くみをするそうです。私たち日本人は、蛇口をひねれば水が出てきますが、世界の中には大変な思いをして水を運んでいることを知り驚きました。発展途上国では、これが当たり前だそ



うです。

でもこの当たり前だと思っていることを、ユニセフのボランティアの方々には、変えることが可能だと話してくださいました。例えば、日本では、3年前に東日本大震災が起きました。そのとき、たくさんの方が募金したり、震災のあった場所でボランティア活動をしたりしました。そして、日本人が協力して、だんだん東北が復興しているというのをよくテレビで見ます。ですから、震災があったときの日本のように世界全体で協力して活動していけば、すべての地域でいろいろなことができるということだそうです。

私は、今中学生です。でも、発展途上国の方たちのために何かしたいという思いにかりたてられ、ユニセフの方に質問しました。すると、その答えは、

「今は、勉強、部活動に一生懸命取り組むこと」

でした。意外な答えで、少し驚きました。しかし、世界を見て、ボランティアを経験してきた方が力強く言われるからには、自分自身で痛感し、強い思いがあるに違いありません。難しくていやになってしまう勉強、辛くて大変な部活動もできるだけ幸せなんだということを忘れず、今、自分にできる精一杯のことをやるのが大切だと気づきました。今の自分にできることを考えるよりも、自分の置かれた環境に感謝し、そこで、一生懸命取り組むことが、いつしか貧しい国の人たちに役に立つことにつながるとわかりました。今は、自分と向き合い、自分を磨いていくことが人の役に立つ第一歩だと思っています。

住んでいる国は違うけど、みんな同じ人間です。すべての人が幸せな毎日を送れるような世界になることを心から願い、自分の今できることを精一杯やっていきたいと思えます。

誰もが安心できる社会

蒲郡中学校 3年 飯田 奈々

明るく、誰にでも親切な奈々さんは、クラスの仲間からの信頼も厚く、慕われています。また、何事にも全力で取り組み、前向きに努力する姿は、みんなの模範となっています。前期副級長として仲間を引っ張りました。

6月のある日、私は友達と遊びに行くためにバスを待っていました。バスが来るまでに時間があったので、友達としゃべったり写真を撮ったりして盛り上がっていました。すると突然、友達が

「危ない。」

と私に叫びました。びっくりして後ろを振り返ると、白い杖を持ったおじいさんが歩道の点字ブロックの上を歩っていました。私はそれに気づかず、点字ブロックの上でじゃまを

していたのです。私はすぐに点字ブロックから降りて、おじいさんに

「すみません。」

と言いましたが、私の声が小さすぎたからか、おじいさんはそのまま行ってしまいました。

私の心の中は、後悔と申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

私は小学校のころ、福祉実践教室を体験して



いたので、白い杖を持った人がどういった人なのかを知っていました。そのときに、アイマスクをして友達に誘導してもらった体験もしていたので、目が見えないことがどれほど怖く不安なことかということも想像できません。誘導してくれる友達が、

「段差があるよ。」

と教えてくれても、段差の高さも分からずとても不安でした。友達に誘導されていても怖いのに、おじいさんは杖が頼りです。杖は人のようにしゃべってはくれません。もし、あの日、私がおじいさんとぶつかっていたら、そして転んでケガでもしたらと考えると、とても怖くなりました。

おじいさんにとって、その白い杖は目となっています。点字ブロックは道しるべとなっています。目が見えない人が少しでも安心して生活していくために欠かせないものです。

助け合う心

西浦中学校 3年 牧原和泉

和泉さんは、いつも笑顔で周囲の雰囲気明るくしています。また、自分が思ったことを実行できる行動力があります。将来は、和食の料理人になって、人を喜ばせたいという夢を持って、頑張っています。

私たちは、普段の生活の中で、何かに困り誰かに助けを求めたくなるような場面にぶち当たることがあります。

私が中学1年生のころ、名古屋分散学習に行ったときのことで。グループごとに興味のある職場を訪問させていただいたり、見学地を訪れたりしました。ある目的地に向かう途中、私たちのグループは駅の出口を間違えてしまい、どっちへ行けばよいか分からず、地図を見ながらきょろきょろしていました。すると、近くでティッシュを配っていた若い

この日の出来事は、小学校の福祉実践教室で学んだことを、改めて思い出すいいきっかけになりました。これからは、友達と遊んでいるときや道を歩いているときに、常に周りをよく見て目の不自由な人が安心して道を歩けるような社会を作っていきたいです。また、点字ブロックの上にゴミがあったら、転んでしまいケガをするかもしれません。そんなことにならないために、ゴミのポイ捨てをしないようにしたり、歩道にゴミが落ちていたら、拾ってゴミ箱に捨てたりして、人のために行動していくことが今の私達には必要だと思います。

目が見えない人だけでなく、様々な人が安心して暮らせる社会を作るために、困っている人についてよく知って、私たち自身が杖となり、道しるべとなっていくことがたいせつではないでしょうか。

男の人が「迷っているの？」と声をかけてくれました。その方は、私たちの目的地の場所を知らなかったのですが、わざわざ携帯で調べてくれました。目印になるものを示しながら、道順をととても丁寧に教えてくれました。その方に「ありがとうございます。」とお礼を言うと、「いいよ。いいよ。」と笑顔で答えてくれました。困っていた私たち



に、自分から声をかけ、ここまで親切にして下さったことがとてもうれしく、心に残りました。「今の若い人は……」なんていうことがよく言われていますが、そんなことはないなと思いました。

しばらくして、今度は逆に私が人助けをする立場になるときが訪れました。西浦駅の近くを歩いていたら、観光客の方に、

「がん封じ寺の行き方を教えてくれないか。」

と声をかけられました。あのとき助けていただいたときのことを思い出しました。一生懸命分かりやすい道順を考え、その方に説明しました。でも、あとから私の説明でちゃんと行くことができたかなと、少し不安にもなりました。

その日の夕方、たまたま道を教えてあげた観光客に出会いました。

「さっきは教えてくれてありがとうね。ちゃんと着くことができたよ。」

と言っていました。それまでの不安だった気持ちが一気に消え、頑張って考えながら教えてよかったなという気持ちに変わりました。

今まで、私は困っている人を見かけても、自分から声をかけることはできませんでした。自分に困ったことがあっても、周りに人に尋ねる勇気もありませんでした。でも、名古屋分散学習のとき、さっと手をさしのべてもらった経験をしたことで、自分もおなじようなことができるといいなと思うようになりました。そして、自分が何か人の役に立てることができ、お礼の言葉を言ってもらえたとき、とてもうれしい気持ちになることも実感しました。このように、助けてもらった経験と何かをして感謝をされる経験がつながり、お互いに助け合う気持ちがどんどん広がっていくといいなと思います。そして多くの人が笑顔で過ごせる社会になることを願っています。

あいさつの力

形原中学校 3年 加藤 の ん

加藤さんは、どんなことにも前向きに取り組むことができ、体育大会の看板作成委員や合唱コンクールの指揮を務めています。そして、多くの人と接し、学校がみんなにとって居心地のよい場所となるように努力しています。

この作品は「第64回社会を明るくする運動作文コンテスト」で、愛知県更生保護女性連盟会長賞を頂きました。

「こんにちは！」このように元気よく挨拶をされて嫌な思いをする人はまずいないでしょう。私はこの言葉には不思議な、そして素晴らしい力があると思っています。

挨拶の良いところは、何の準備もいらず、いつでも、どこでも、誰にでも声をかけられることです。また挨拶をすることで、人の印

象が変わることもあります。

それは私が小学校に入ったばかりの頃、母と一緒に普段は通らない橋を渡ろうとした時のことです。すれ違うのも大変な幅のせまい橋を渡り始めると、中程に怖そうな中学生、高校生が数名いました。彼らは欄干から海に飛び込んで遊んでいました。服装が派手

で、髪を染めている人もいました。母も不安
そうで、もう引き返そうと思った時のこと
です。その人たちが思いもよらず「こんにち
は！」と挨拶をしてきたのです。本当に意外
でした。私達もとっさに「こんにちは」と挨拶
し、何とも言えないさわやかな気持ちで彼
らの横を通り抜けることができました。挨拶
ひとつで、こんなにも人の気持ちや印象が変
わるのかと思った瞬間でした。

また、去年私がオーストラリアへ行ったと
きも挨拶のすばらしさを感じました。私は外
国へ行くのが初めてで、自分の英語が通じる
のかとても不安でした。最初、ホームステイ
先の子に会った時のことです。金髪で灰緑
色の目をした彼女は大人びて見え、同い年と
は思えず、私の緊張は頂点に達していました。
何か言わなければと思い悩んでいたところ、
彼女が手を振りながら「Hello」と笑顔で話
しかけてくれました。思わず私も「Hello」
と自然に返すことができ、一気に気が楽にな
りました。さらに現地の学校を訪問したとき
には、すれ違う人が皆「Hello」「Hi」と必ず
挨拶してくれました。その挨拶によって気
持ちがほぐれ、少しずつ会話ができるよう
になりました。挨拶には、人と人の距離を縮

め、仲よくさせてく
れる力があるのだと
実感しました。

挨拶は人と人とを
つなぐ第一歩である。
それをもっと身近な



ところで感じたこともありました。それは学
校の登下校のときです。近所の人に挨拶する
と、それがきっかけで「あれ、日曜なのに学
校?」「部活かぁ。頑張ってるね。」と励まされ
たり、「お帰り。今日は随分早いんだね。」「授
業が午前中だけでした。」などと会話がはず
んだりしました。また挨拶をしながら資源ゴ
ミを仕分けしたり、資源ネットを一緒に広げ
たりすると、連帯感が心の中に広がりました。
挨拶がきっかけで、いろんな人たちとも気持
ちを一緒にすることができたのです。「知ら
ない人だからいいや」「恥ずかしいからやめ
ておこう」かつての私はそう思うことがあり
ました。でも今は違います。私は挨拶が大好き
です。みんながもっと気軽に挨拶をして声
を掛け合えば、災害時など、いざというとき
にも手を取り合えるはずです。挨拶の力で社
会はもっと明るく、より暮らしやすくなると、
私はそう信じています。

見えない中にこそある大切なもの

塩津中学校 3年 岩瀬真帆

岩瀬さんは、生徒会長として、塩津中を市内ナンバーワンの学校にしようと、歌声集会など数多くの企画を成功へと導きました。思いやりに満ち溢れ、そばにいただけで周りが幸せになれる人柄です。

この作品は平成26年8月西尾市で行われた少年の主張愛知県大会で発表し、奨励賞を頂きました。

「お母さん、私どうすればいいの？」
何もかもどうでもよくなる瞬間に頭をよぎ

る心の声。そんなイライラしたときに限って
母が声をかける。

「どうしたの真帆？顔が暗いよ。何か悩みごとでもあるの？」

心配した母の声に何度救われたことか。私の自慢の家族です。

いつものように家族で夕食を囲んでいると、テレビ画面から嫌なニュースが飛びこんできた。

「15歳少女が殺害された事件で、警察は18歳少年を逮捕しました・・・」

最近、少年による犯罪が増えたように感じるのは私だけでしょうか。中には少年が犯したとは思えないほどひどいものもあります。

「少年による犯罪」この言葉をテレビや新聞で見たり聞いたりするたびに、私は複雑な気持ちになります。同じ「少年」という立場として、なぜ罪を犯してしまったのか自分の身に置きかえて考えてしまうからです。

「悪いことを悪いと思わない」逆に楽しさ半分でやってしまうのでしょうか。命を重く感じず、どちらかといえば軽く考えているのではないのでしょうか。テレビゲームのリアル化、インターネットの普及などがもたらす影響、情報化社会の中で、正しいことを正確に判断できる少年が減っている、あるいは教える大人がいないなど、さまざまな無責任が重なり合い、招いている問題だと思います。

少年であろうが、犯した罪の重さは大人と同じはずです。私たちは人間としてこの世に生まれた以上、責任と背中合わせで生きていかなければいけません。責任能力が低いからという理由だけでは済まされない問題です。少年でも自分の行動にもっと責任をもつべきです。そして、ツールを与える大人たちも責任をもって与えるべきです。

他にも、悩みやいらだちを抑えきれずに、

罪を犯してしまう少年たちもいるのではないのでしょうか。これは悩みを相談できる家族や仲の良い友人が近くにいない、特に人間関係の希薄化が招いている問題だと思います。

私と同じように「家族」をもっている、コミュニケーションがなければもっていないのと同じだと思うからです。共働きの家族が増え、家族そろって食事をとる時間が減ったこと、電化製品の普及によって、テレビも一家に一台から一部屋に一台の家庭が増えたこと、同じ家にも、家族と一緒にいる時間が少なく、会話も極端に減り、悩みを打ち明けにくくなっていると思います。親自身も子どものSOSに気づかずに、サポートするタイミングを逃してしまうといった悪循環が招いているのではないのでしょうか。

子どもは大人を見ています。ときには助けを求めます。心配してくれる、話を聞いてくれる、見ていてくれる人がそばに、私たちが子どもにとって、大きな支えとなります。



便利さがもたらす物の豊かさも確かに必要です。しかし、これ以上に必要なのは心の豊かさです。東日本大震災のときに改めて気づいた、「人の温かさ、絆」の大切さ。これこそ日本人が世界に誇れる財産だと私は思います。

日本の未来を担うのは、間違いなく私たちです。社会から犯罪がなくなり、日本人同士寄り添い合い、助け合える国になることを私は望みます。

私は家族だけでなく、仲間も大切にできる

大人になりたい。だからこそ、生徒会の一員としてみんなが通いたくなる素敵な学校を創りたい。これが今の私にできることであり、大きな目標です。

「大丈夫だよ。お母さんが応援しているから

ね。気晴らしに買い物でも行こうか。」
今日も母の明るい声に支えられ、私は明日への一步を力強く踏み出します。

「行ってきます。お母さん。」

人の気持ちを考える

三谷水産高等学校 3年 下 地 隼 人

下地君は3年間室長を務め、クラスをまとめ、担任の先生をしっかり支えており信頼が厚いです。増殖部では、黒アワビの養殖や水生生物の飼育を頑張っています。またボランティア部にも所属し、地域の方々の役に立つ活動にも参加しています。

みなさんも一度は「体の不自由な方に優先席を譲れ。」というような言葉を耳にしたことがあるのではないのでしょうか。私は小学生のときに「お年寄りに席を譲りなさい。」といろいろな人に教わりました。そしてそれを確かに実行してきたつもりです。しかし、高校に入ってみるとあることに気づいたので

す。
私は高校に入学して、とても電車に乗る機会が増えました。ある日の、帰りの電車でのことです。私はぼっかり空いた優先席を見付けました。最初は誰も座りたくないだけなのかなと思いました。しかし、周囲には結構立っている人が多いのです。おかしいなと思い、少しその人達を見ていると、そこには2人、楽しそうに立っておしゃべりをしているおばあさんがいたのでした。

そこで私は気づきました。その人達はそのおばあさん達に気を遣い、座れないのだと。そして私は「高齢者の方や体の不自由な方のための優先席」という言葉に疑問を抱いたのです。確かに私たち若い人間は席を譲るのが当然だと思います。しかし、私たちだって本

当は疲れており、座りたいのです。それを我慢し、高齢者の方のために座らないのです。なのに、そこに高齢者の方も座らないとなれば、それは無駄というものです。

もう1つこれも電車での話です。ある満員電車の中、私の目の前には恐らく立っているのが辛いであろうおじいさんが1人いました。私は「この席どうぞ。」と譲ろうとしました。しかし、おじいさんは「何だ坊主、俺がじじいだとでも言いたいのか？」と怒られてしまいました。これも私に限らず似た状況を何度か見かけました。確かに席を譲られるというのは、少し目立ってしまうので嫌な気持ちになってしまうのも分かります。しかし、譲る人の気持ちはもっと恥ずかしく勇気がいることなのです。それを譲られた人がひどい言い方で拒否してしまえば、もう2度とあんな思いはしたくないと思ってしまうのは当然ではないのでしょうか。

人の気持ちを考える。私の話したおばあさん、おじいさんがそれを考える人達だっ



たらどうなっていたでしょうか。きっと素敵なお話が変わっていたはずなのです。何も電車だけではありません。歩きスマホは車の運転手からすれば恐ろしい思いをする。ポイ捨てをしたなら、それを拾わなければならない人がいる。そんな人達が人の気持ちを考えられる人達だったなら。

私は、日常の些細な出来事からこのようなことに気づきました。些細なことに、ありふれたことに、人の気持ちがあることを皆が考えることが出来たなら、それこそ、きっと明るい社会に少しずつ近づいていけると、私は信じています。

安心できる地域社会をつくる

蒲郡東高等学校 2年 甲 斐 聖 菜

甲斐さんは、吹奏楽部でサクソフを演奏し、毎日練習を続ける努力家です。高校1年時より、生徒会役員を務め、今年度前期はクラスの室長と生徒会長を兼任し、クラス内でも、学校全体でもリーダーとして活躍しています。各種ボランティアにも積極的に参加するやさしいお姉さんです。

私は以前、生徒会執行部・生徒会長という貴重な経験を学校でさせてもらいました。私が生徒会長になったときは、生徒会長というとても重要な仕事が、私にできるかどうか不安でした。そのことで、すごく悩み、時には泣いたこともあります。生徒会の中でトラブルが起きたり、なかなかまとまらなかったり、仕事をうまく伝えることができなかつたりと、とても大変でした。そんな中でも常に励ましてくれた友達がいました。悩みを聞いてくれる先生・友達もいました。一緒に泣いてくれた先輩・後輩もいました。また、挨拶運動に参加してくれた仲間、いままで一緒に仕事をしてきた生徒会執行部、私はとても多くの人に支えられているのだと実感しました。

そのときに常に目標にしていたことが、『地域に愛される蒲郡東高校』でした。その第一歩として、私たち生徒会執行部は、毎月ゼロのつく日にあいさつ運動を行いました。最初は、たくさんの方が参加してくれましたが、時間が早い、朝の補講と重なる、などの

理由でだんだん参加してくれる人がいなくなり、自然とあいさつ運動がなくなっていました。そんなときに、大塚中学校の生徒会執行部から「あいさつ運動を一緒にやりませんか？」と声をかけていただきました。最初は7月11日に行う予定でしたが、雨天のため中止になりました。しかし、せっかくのチャンスを無駄にはしたくありませんでした。その思いは大塚中学校の生徒会執行部も同じだったらしく、14日に急遽行うことになりました。日にちが変更になったのでSNSで呼びかけを行いました。しかし、週末だっ



H26.7.14 三河大塚駅で行われた、蒲郡東高校と大塚中学校のあいさつ運動の様子

たので参加者が集まらないのではないかと心配しましたが、駅についてみると、とてもたくさんの人が集まっていました。とても感動しました。参加してくれた人には感謝の気持ちでいっぱいです。

あいさつを行うことは、あいさつをするほうも、されたほうも気分がよいです。目標である『地域に愛される蒲郡東高校』を達成する第一歩になったと思います。

あいさつ運動以外に、私が積極的に取り組んだ活動はボランティア活動です。豊橋市の歩行者天国・さがらの森での文化祭のお手伝い、そして、大塚小学校・大塚中学校・蒲郡東高校共同で行う海岸清掃ボランティアなど、地域の人たちとふれ合うことのできる行事に積極的に参加しました。

このような活動を通して私が感じたことは、1人で行動するのではなく、みんなと協力し合い、助け合っていくことは、明るい社会をつくるということにつながると思いました。地域の人たちとの繋がりを大切にしていけば、明るい社会だけではなく、私たちは

今までよりも安心して学校に通えると思います。そのために大事なことは、私たちと地域の方々の信頼関係を今以上に深める必要があります。そのために最初にお話した、あいさつがとても大切なキーワードになってくると私は考えます。また、地域の人が置いているゴミ箱を勝手に利用したりするなどの迷惑行為を行わないということも、お互いの信頼関係を築くことにつながると思いますが、あたりまえのことが、あたりまえにできるようにになりたいです。

私のこれからの課題は『発信』です。生徒会の立会演説会のときに私は自ら発信するということを公約しました。しかし、何をしてもよいかわからず中途半端に終わってしまいました。その悔いを糧に、これからはあいさつ・あたりまえのことをあたりまえにすることなどを私から発信していき『地域に愛される蒲郡東高校』をつくっていきたいと考えます。そして蒲郡東高校だけでなく蒲郡の全ての学校でも同じように活動し、輪が広がっていけば良いと思います。

母からのバトン

蒲郡高等学校 2年 尾崎 葵衣

尾崎さんは、いつもやわらかな笑顔で回りを明るくしてくれます。夢は金融関係への就職。まっすぐ目標に向かい、授業はもちろん、資格取得やビジネスアイデアコンテスト等にも、積極的に取り組んで活躍しています。

「反抗期」それは誰もが経験していくものです。もちろん、私も中学の頃にありました。でも、高校受験を通して私の反抗期は終わりました。受験が近づいていくにつれ、私は精神的に疲れていきました。そのとき、母が言った言葉は、「葵衣ならできる。大丈夫。」でした。私はその言葉で、不思議と気持ちが軽

くなったことを今でも覚えています。

私には夢があります。それは、母のような親になることです。どんなにくじけそうなきも支えてくれて、私の気持ちを理解しようとしてくれる、優しく、格好良く、強い女性になりたいです。今、テレビをつければ「虐待」や「いじめ」などのニュースが絶え

ません。私が最近見たニュースで驚いたものがあります。それは義理の父親が息子に「24時間以内に死ね」と言い、息子は自殺してしまったという事件でした。血がつながっていないことを理由に、そんなひどいことをよく言えたなと思いました。息子は、言われたときどう思ったのでしょうか。考えただけで胸が痛くなります。世の中にはこんな家族もあるのだと知りました。これらの問題はあってはなりません。絶対に無くすべきです。しかし、それは簡単なことではありません。みんなの力や支えが必要だと思います。

先ほどから、偉そうなことを言っている私ですが「困った人がいれば、すぐに助けられるし、これらの問題を無くすために大きな努力をしています」とは言えません。声をかけることはとても緊張するし、勇気がいります。困っている人がいても何もしてあげられなくて、後悔したことだって何度かありました。だからこそみんなで社会を変えなければいけないと思います。私は政治家でもなく、普通の高校生です。だから社会全体を変える力がない分、自分ができることをしたいです。私ができることは、母が私にしてくれたように私も相手の相談に乗って、気持ちを少しで

も軽くしてあげることだと思います。その問題が解決できなくても、他の人に話すだけでもだいぶ気持ちが楽になると思います。また、私たち高校生をはじめ、多くの人が誰かを好きになったり、何かに憧れたりしながら、夢を追いかけていけば、社会は少しずつかもしれないけど、前に進んでいくと思います。

例えば、私は将来、金融関係の仕事に就きたいと考えています。理由は、以前、母が働いていた職業だからです。実際に母が働いているところは見たことはありませんが、きっと輝いていたと思います。私はこの夢のために授業も、商業部での資格取得もがんばっています。私はこうして、母からたくさんの影響を受け、教わってきました。それを母から私、私から子ども、子どもから子どもへと続けていけば、私の理想の社会になるかもしれません。その可能性を信じて、未来のバトンを繋げていきたいと思っています。



<参考資料>

○47 ページイラスト

国土交通省 中部地方整備局 中部技術事務所ホームページ

<http://www.cbr.mlit.go.jp/chugi/barrierfree/m3/>よりイラストを引用